その點に至ると、ロシア人は溫順しいものであつた。たとへ出した賃銀に不服があつても、支那人の樣に決して喧噪めいた聲を出さず、憐れな顏をして默つてゐる。いかにも溫順なしい。氣の毒な位である。あの大きな髯面でも云ふに云はれぬ可愛氣がある。

あれか之かとボートを物色してゐる時、一人の洋服をズタ〳〵にしたロシア人がサモ哀願する樣に、自分のボートを指さして、どうか之に乘つてくれと賴む樣にした。見れば其のボートは可成綺麗であつたから、旁々ロシア人のボートでもあつたから、一二も無く一同はそれに飛び乘つた。刎ねられた支那人一同は此の體を見ると、もう駄目だと許り、サツと潮を引いた樣に引いて了つた。我々は勝利を此のロシア人に與へたと云ふい〻氣持ちで其の樣を見てゐた。そのロシア人も嬉し相な顏して滿面を快心の微笑で湛へながら勇ましく櫓を握つた。斯くして松花河江は次第に橫斷された。

河口には何千噸と云ふ大きな汽船が二三艘あつた。それは美しい客船であつた。吉

村君はそれを指さして『彼船ですよ、よく馬賊に襲擊されるのは』と云ふた、訊いて見ると、此の川は幅は此處でこそ廣いが、ズツと上流へ行くと、それは狹くなる。その極く狹くなつた所の岩壁から、突然馬賊が現はれてボン〳〵と遣つて、停船させ、乘客の所有物全部や貨物一切を奪掠して行くんだと云ふ。それなら豫め其等に對抗する爲めに武裝して船員が應戰したら何うだらうと云ふと、若し其麼事をして、萬一戰ひ此方に利あらざるの時は全部殺戮されて了ふ。だから生仲反抗をしないで爲すがままになるんだと云ふ。そんなことをすれば、先方ではい〻氣になつて襲擊するぢやないと訊くと、い〻氣になつても致方がない、方法がないと云ふ。後日私はハルビンから歸りの汽車の中で、某參謀本部の要職の人に逢つて、此のことに就いて話をした所、『私は船一艘毎に機關銃を備へ付けておいたらい〻と思ふ』と云ふた。流石は軍人だ。機關銃でボン〳〵やつ付けたら、片ツ端から倒されて了ふ。軍人は重ねて云ふに『あの船に乘る者は殆んど支那人かロシア人ばかりだから、いくら掠奪されても此方

の腹が痛むんでないから、他人のセンキを惱む必要がない』と、呵々大笑してゐたつけ。

河には又一つの島があつた。島には大きな建物があつた。それは料理店でロシア人の貴族階級の者が遊覽旁々一杯きこしめしに來る所だと云ふ。その島を過ぎて向ふ岸を見ると成程海水浴をしてゐるロシア人の男女がアリ〳〵と見え出した。

『それ急げッ』と云ふと、ボートマンは笑ひながらギイ〳〵と速力を出して、だんだん近付いた。望遠鏡などで翳すと、彼等とて恥を知るもの、急に厭がつて水の中へ沈んだ儘、顏きりしか見せぬと云ふ注意があつたので、それではと急いで隱して了ふ。

やア、あすこにゐるのは素敵な美人だ。

やア、あすこにゐるのは肉體豐滿だ。

一同は俄かにキヨロ〳〵して、風景そつち退けに、眼を皿の樣にして、やア〳〵と云ふた。男と女がキヤツ〳〵云つてジヤレてゐる。追ひかけたり、水を浴びせたり、一

又おんぶしたり、眞白な雪を欺く身體が浮いたり沈んだりしてゐる。異國人一人も交らない純ロシア人ばかりだから誰にも遠慮がない。

あまり人込みの烈しい所へ乘り入れては折角の興を醒すものだし、又急に水の中へ沈んで了ふ恐れがあつたので、ボートは態々少しく上流の岸へとつけられた。

そこには二人の妙齡花の如き美人と、二人の秀麗なる若紳士の四人が、丸く圍んで砂いぢりをしてゐたが、僕等の姿を見ると、何を思ふたか一同申合せた樣に、ドンブと許り河の中へ飛び込んで了つた。

岸へ上つて見渡すと、如何にも云はれた通り無數の小柳がある。フと同行のNの姿が見えなくなつたかと思ふと、『どこにゐるか解るか』と、云ふ聲がする。僕は試みに其の聲の方を見たけど、其の姿がサツパリ解らない。

『どこだ？』

『此處だよ』と、云つて柳の枝をガサ〳〵動かして見せた上、首をヌツクと出して、

『畫でさへ此の通りだ、況んや夜に於ておや』と、彼は云ふた。なるほど。更に改めて眸を放つと、小柳の外、木と云ふ木は一本もない。果しなき曠野である。ところどころの小高い所に男女の散策の姿が仄見える。又小柳と小柳の間を縫ふて消えたり見えたりする二ツの頭があつた。

我々の足は漸次人の集つてゐる場所へ來た、そこには無數の男女の群れがゐた。そして恰も泰西名畫を見てゐる樣に、全部赤裸々であつた。先方が平氣でも此方が恥かしくなつて來る。

ヤレ他人に素足を見せるのは失禮の、股を見せるのは不埒のと、人一倍不埒呼ばはりの喧ましい外人が斯うも大膽になれるのかと思ふと、たゞ〳〵茫として了はざるを得ぬ。滿鐵公所長古澤さんの云ひ分ぢやないが、なる程ロシア人は極端から極端だわい。

我々は暫らくの間そこへ腰を下ろして大に純藝術(?)の粹を賞觀した後、さらば

と許り立ち上つた。Nは夕暮れまで待つて、小柳の中を縱横無盡に駈け廻り、荒しめくり、大に武勇を發揮しやうと主張したけど、已れとて人情を解するもの、そんな無粋なことをして、平和を亂すものでないと云ふて、首を振つて見せた。

『それでは』と、小手を高く翳して上流に待つてゐたボートを呼んだ。彼は急いでギイギイ漕いで來た。

歸る途中いくつも〳〵のボートが此方へ差して來るのと出合つた。それには必ず美しい娘と若い男が乘つてゐた。もう夕日が落ち樣としてゐるのに、今から水浴でもあるまいにと思ふと、可笑しくなつた。

岸へ上がつた頃、闇がもう四邊をこめてゐた。向ふ岸は眞暗だ。かれ等はさぞ今頃は享樂の世界に亂舞してゐるだらう、ひそやかに囁いてゐることであらう。

◎

最後に一寸書きたい、それはボートマンにNは與ふるに僅か半圓を以つてした。彼

は掌に載つた其の報いられた勞力の報酬の餘りに少ないのを見て、Nを追つかける樣にして、それを示しながら訴へる樣にした。Nはサツサと振向きもしないで上つて了つた。あとから蹤いて行つた私は可哀想になつて、思はずポケツトに手を差入れて財布を取出しかけたが、若し自分が更に少しの心づけを出さうものなら、彼に惡い習慣性を與へはしないだらうかと思ふて俄かに躊躇した。及びNが正當なりと認めて出した額に、自分が差出がましく又そんなことをするのは、Nに濟まぬ樣な氣がしたので思はず又引込めて了つた。

然し其の時の其のポートマンの憐れな、そして無理に訴へることも出來ぬ弱々しい表情が、今でも私はハツキリ浮び出すことが出來る。そして何故私はあの時少しく餘分に與へて遣らなかつたかと、後悔してゐる。

聊か懺悔の爲めに之れ丈けを書き足しておく。

左樣なら

ハルビンを去る時は何んとも云へぬ淋しさであつた。この華かさと、美しさを重ねて見出す日があるだらうかと思へば、猶更獅嚙み付いてゐても放したくない樣な氣がしてならなかつた。

私と相見た多くの美はしいロシアの娘達よ、いつの日か再び來るの時までお身達はあの輝きの下に住んでゐるであらうか？　あの純美さで、あどけなさで、お身達は待つてゐて呉れるであらうか？　パンの脅威と、本國を遁れ出でし者の上に來る運命は屹度樣々にお身達を弄ぶに違ひない。

『私も日本へ、あゝ東京へ』と、母を亡ひ、父を不明にした妙齡十七のヂンナーが私の膝に泣き崩れたあの姿が傷ましくてならない。滅したる國の人かと思はれる許りの

艶麗比なきあのタチアナ孃が悲しけに歌ふた聲が耳についてゐてならない。

又ハルビン一の豪華なる生活をなせるW氏の令孃達よ、女王に似たる肉ゆたかなる夫人の君よ。すべては皆心から私を引留めた。けれども私は矢つ張り去らねばならなかつたのだ。

私をして再び云はさしておくれ、何んと云ふ淋しさであらう。

ハルビン夜話（終）

（附錄）大連まで

黄塵吹きすさぶと云ふ滿洲に本當に親切な物の解つた人がゐる、己れは大好きだ。好きな筈だ、己れを遙々滿洲へと招聘して呉れたんだもの、その物の解つた人と云ふのは滿蒙文化協會書記長の笠原博君である。

博君と己れとは全然未知の間柄である。所が或日いつもの通り友人やら未知やらの手紙を私は受取つた、その裡の一通に笠原博と云ふのがあつた、それが抑々博君の名を知つた始めである。私は封を切つた。

『私は貴方と未知の者です、未知の者が斯うして手紙を差上げるからには何か異常なる感激か興味あつての仕業にちがひない。

私は今大阪商船のばいかる丸の船客である。つれ〴〵のあまり圖書室へ入つて面白

い本も無いものがなと書棚を覗いて見た。所があるわ、あるわ、奥野他見男著と云ふのが幾冊もあつた。お名前は豫ねてから知つてゐたけど、本を手にするのは始めてだ。試みに「大學生の兵隊さん」と云ふのから先きに披いて讀んだ。謹嚴なる私の腦が鼓に於て大に崩れて了つた。こりや面白いぞと續いて「若きものよ高らかに歌へ」だの、「君と寢ようか五千石とろか」だの、續いて五六冊、息もつかずに讀み通した。その揚句に思ふた、他見男さんは實に偉い、赤の他人の頬べたを遠慮會釋なく崩して了つた。

全く何んと云ふ文の輕妙さであらう。何んと云ふ垢抜けした筆であらう、イヤそれよりも愉快なのは貴方の氣持ちである。碧空を仰いだ樣なカラリとした氣持ち、男性雄々しい裡に詩趣ゆたかな情味に至つては、我輩ツク〳〵兜を脱いだ、私とて髯面下けながらも他見男さん黨の一員になつて了つた。

私が餘り貴方の本を一生懸命になつて讀んでゐたものだから、おかげで絶世の美人

からお言葉を測らずも頂戴する光榮に浴した、それは今朝のことである。例に依つて圖書室で妙鼻に打たれて、思はずプツと吹き出した所、側にゐた美人も思はず、私の笑顔に釣り込まれながら笑つて、『他見男さんの本でせう？』と訊いた。それをキツかけに貴方の話が出た。所が不思議なるかな其の美人こそ貴方の顔をよく知つてゐると云ふ、それ許りか御自慢なさる通り此の頃は少し年齢の故で顔が大分錆びたけど、それでも矢つ張り眉目秀麗だわと仰言る、それのみか其の美人も、あなたの住んでゐる西大久保に一昨日まで住んでゐたと云ふ、そして『他見男さんつたら本當に堅い人ですつて』とイヤ賞めるわ賞めるわ、ハテナ變だぞ、臭いぞ、イヤこりや大に失敬。

とにかく著書と此の美人の言に依つて我輩の食指大に動いた。食指動いたとは外でもない私の協會は金を出して滿洲を擴く天下に紹介するのが商賣である。その爲め毎年一人二人、滿洲へ名士を紹聘して講演を願つた旁ら滿洲とは如何で御座る、良い所であらうがなと方々へ案内して見せ付ける、『ウム成程い〻所だ』『ウムこりや素敵だ』

と仰しやる。その『成程いゝ所だ、素敵だ』と云ふ事を内地へ歸つて吹聽して貰へば其れでいゝんです。なんと他見男さん、今年の名士は是非他見男さんがなつて貰ひたい、正直に云ふと、從來幾度か知名の文人が來たけれども、大抵案内記類に終つて了ふ。私は思ふた。百の案内記より一の他見男さんに如かずと。貴方のあの觀察と、あの筆で滿蒙が天下に紹介されたら、これに優るものあらんやです。我等若し幸ひにして其の光榮に浴することが出來たら、大に隨喜の涙を今まで以上に流して見せます、」

他見男さん、きツときツと來て下さいッ。

唯來てさへ貰へばいゝんです、私は其の爲めに見聞記を書いてくれとか、講演をして下さいとか、何等條件を出しません、スーツと來て、スーツと歸つて貰へば其れでいゝんです。その費用は勿論此方から全部提供します。

あゝ全滿洲の老いも若きも擧つて他見男さんの姿を待つであらう、歡迎するであらう。

いざ他見男さん、願くは「諾」と云ふてくれ。』

己れは微笑みながら讀んだ。文の輕妙己れ以上だ。博君隅に置けないぞ。

己れは己れ見たいな駄こそ生えてゐるが、野球や庭球見物に夢中になつて『しつかりッ。』『ホームラン打て』と四邊かまわず胴羅聲張り上げる男を、名士扱ひして呉れると云ふんだから、うツ、うツ、うれしいッ。

更にだ、來たからにや斯うして呉れの、あゝして呉れのと云はず、一切無條件とは第一其の出方が吾人大に快とするでは無いか、人間と云ふ奴妙なもので、斯うして、あゝしてと云はれると、却つて其れに反抗したくなる『ナニオツ』と思ふ。それを『ナニオツ』と思はさぬ所が博君の見上げた所だ、滿蒙文化協會の書記長殿、頭がエ、ぞ。

そこで今度は此方が食指大に動いた、と云ふのは恰度どこかへ旅行したいナと思ふてゐた矢先きであつたからだ、及び滿鐵にゐる弟から大連は東京より良い街だ、一遍

來たら何うだと豫ねてから勸められてゐたからだ。更に又一度巡遊した友人から『君なんざ大に漫遊して來る價値がある』と、逢ふ度に云はれてゐたからだ。況んや名士ときた。況んや無條件ときた。あゝ乃公立たずんばあらず。

そこで私は認めた、『まだ見ぬ博さん物が解る。そこでだ、私は筆の先きでこそ滑稽なれ、人間は絶世の美人の宣はせ給ひしが如く如何にも堅い、人間が至極以て眞面目である、酒一滴も呑まず、菅原道實の子孫の樣に謹嚴そのものゝ樣な顏をしてゐる。その點豫め御承知を願ひたい、但し此の菅原道實は文明の有難さに感泣した故か非常に舞踏が好きだ、そこで大連に舞踏があるか流行るか、それが第一に私を支配する。若し大連に於て天つ晴れ天下の他見男さんの喜ぶ舞踏があるなら、今は何んの躊躇ふ可き、氣を附けッ、駈け足ッ、と大連へ飛んで行く。舞踏が無けりや、同じ行くにもあゝ世の中淋しや、味氣なやである。

又講演も遣ります、遣りますとも。但し其れは婦人に限つて欲しい、男の顏を見て

話してゐた方がいゝか、女の顏を見て話してゐた方がいゝかと云ふたら、そりや女の顏を見て話してゐた方がいゝ、こりや人情だ、人情から割出して聽集は婦人に限つて貰ひたい。

猶その外一切は萬事お任せします』と、出した。

一應又、その序に弟にも手紙を書いて、『滿蒙文化協會の笠原と云ふ人から、斯うした話があつた、君は其の協會を知つてゐるか』と、出した。暫らくして雙方から返事が來た。

笠原博君から、

『舞踏は東京よりも大連の方が寧ろ本場ぢやありませんか、私は舞踏のことは全つきり門外漢で解りませんが、ようごわす、貴方の爲めに歡迎舞踏會を開きませう。それから大連では他見男さんが來ると云ふので、大騒ぎやら、大喜びやら、モテますねえ貴方、モテますねえ他見男さん、旅費此處に同封して置きました。なほ旅行に關する

詳しいことは丸の内滿鐵支社内の運輸課長坂本兄にお聽き下さい、玆に入れてある名刺に紹介してありますから』と、何から何まで手廻はしがいゝ、私は感激した、その證據には身體がブル〳〵ッとした。弟からも來た。

滿蒙文化協會と云ふのは滿鐵と姉妹關係があると云つてもいゝ位密接な關係がある毎年必ず名士を招聘して滿蒙の文化を啓發してゐる。君が來ることは大賛成だけど、あの訃報を思ふと、弟としてハラ〳〵今から心配になる。願くば毎日屋根の上へあがつて『サテ皆さん』を練習しておいてくれと、大に兄貴を想ふて來てゐる。屋根の上とは傑作だ。

アヽラ情けなや屋根の上の名士他見男さん。

さア行くぞ滿洲へ。錆びたりと雖も此の顏、此の男性美、さア行くぞ滿洲へ。

◎

一切の準備相成つた。旅立つ用意をしてから己れは妻に向つて訊いた。

『君は東京驛へ己れを見送つてくれるかい？』

『そりや貴方、夫婦ですもの！』

『うれしいッ、夫婦うれしいッ。』

けれども、直ぐ私は物足らぬ顏して東京驛を放れて了つた。それはイザ汽車が動き出して『左樣なら』『左樣なら』を云つた時、彼女つまり愛妻は少つとも涙を流して呉れなかつたからだ。私と云ふいとしい旦那樣と別れるのが悲しくないのか知ら、僕が女だつたら、アレー貴方ッとヨロ〳〵として見せるんだけどなアー。妻は少つともヨロ〳〵ッとしなかつた、泰然自若としてゐた、名士の妻となると心掛けが違うわい。

猶、別れる時、さア靜子(六歳)さん、お父さまと握手なさいと云ふて、御自分は手を出さなかつた。夫婦になつて滿七ヶ年、今更手を握つた所が、血がクラ〳〵するでもなしと諦めたんだらう。

握らず、泣かず、滿七ヶ年の夫婦なる哉。

◎

神戸驛より一つ手前、三の宮で下車した。船に乗るには其の驛で下りるのだと教へられてゐたからだ。直ぐ車を呼んで大阪商船の支社へと走らせた。滿鐵で買つた切符に船室番號を書き入れて貰ふためだ。

支社の建物は宏壯の趣があつた、船客係長の堀駿次郎さんや、小川子造さんは多くの船客が詰めかけてゐたにも係はらず、少つとも面倒な顏を見せず、どの客にも絶えずにこやかに笑んで、懇切に且つ親切に應對してゐたことは旅の第一歩に於て私に泌々嬉しいことであつた。恰度幸ひ其の時私の乗るハルビン丸の事務長猿田春景さんが入つて來て、

『やア奥野さんですか、お待ちしてゐました』と、聲かけてくれた。見るからに穩かな溫かい感じのする人であつた。

一切は堀さんや小川さんに依つた敏捷に輕快に運ばれた。私は厚く感謝して再び待

たしてあつた車にヒラリと乗つた。埠頭まで三四町に過ぎなかつた。

五千三百噸の大船は横付けにされてあつた、船の赤帽が『一等ですか、ヘイ』と云ひながらトランクを先きにズン〳〵案内してくれた。

斯くして私は生れて始めて船客と云ふものになつた。

◎

船は走る、靜かに走る。青疊の如き海原よ、左すれば淡路島、右すれば須磨明石の景勝全で繪の様だ。

けに美しい、けに面白い。

成程音にきく瀬戸内海だわいと思ふた。甲板の安樂椅子に長身を横へながら、飽かや眺めてゐる時の嬉しさ、天下之に如くの快あらむやと思ふ。こんな景色を素敵な愛人と、『御覽なさい』『林の中に赤い家がある』『まア色の配合が素敵だわ』『あの砂邊は美しいねえ』『まア美しい、散歩して見たいわねえ』などと會話を交へたら、さぞや之れ

以上の天下の快事だらうと大に思ふ、どつこい妻に此の量見知れたら一大事。

◎

恰度己れが船室へ入つて。汽車中の不眠を補ふ爲めにゴロリとなつてゐると、そこへ見るからに雄々しい男性がヌツクと現はれた。

『失禮ですが、奥野他見男さんと云ふ方は』と、彼は云つた。パツと己れは飛び起きて、

『ハア、私です』と、答へた。

『やア私は針重です、只今お部室の前を通りまして、お名前が書いてあつたものですから。』

『やア、これは意外な所で』と、己れは心から嬉しかつた。針重とは武俠世界主幹、兼東京オフセツト印刷株式會社專務取締役兼日本庭球界の元老である。お互は既に疾くから名を知つてゐた。まだ見ぬながら手紙も交換してゐた。よもやに此麽船中で初

對面を互に名乘らうと思はなかつた、きけば帝大、慶應、早稻田の日本一流の庭球選手を選りすぐつて、今から滿洲へ遠征に出かけるんだと云ふ。武俠世界の主幹だけあつて顏見るからに魁偉、豪快である。

この故を以つて、直ぐ一同の選手と友達になつて了つた。

『貴方のことを先刻、選手一同に告げたら、他見男さんて、あんな眞面目な顏の人とは思はなかつたと云つてたよ』と、あとで針重君が知らせてくれた。

針重君は隣室にゐた。その相客は餘りに聖人君子だから君と一緒になりたいと云ふ。君も僕と一緒にゐる貴公子よりか君と一緒になりたいと云つた。一緒にならう、一緒にならうと叫きながら事務長の部室へ駈け込んで、どつちかの客と入れ換へして貰ふ譯には行きますまいかと嘆願したけど、それ許りはどうもと挨拶されて、二人共『儘ならぬ世の中ぢやなアー』と世の中を大にうらんだ。

合緣奇緣と云ふものは全く妙なものだ、僕の相客と針重君の相客とは知り合ひなん

だ、して見ればお互が部室を換り合つた方が、お互に都合もよく便利もよく、又話相手にもよかつたんだ。然し已れ見たいな人一倍面の皮の厚い男でも、流石に『君隣りへ行つてくれないか』とは何うしても云へなかつた。已れと云ふ人間も人の顏色を見る様になつたのか。勇氣が無くなつたのか、又天つ晴れ武俠世界主幹も『これ許りは何うも』と、どうしても相客に切り出す勇氣が無かつた。この所大に武俠で無い。

兎に角二人は顏さへ合はせば『どうか出來ぬかなアー』と謀議を廻らしたけど、名案が浮ばなかつた、了ひには『もう駄目だ』と部屋の方は諦めて了つて、せめて食堂で一緒に坐らうと、大に親交を深うした。

針重君も僕も仲々偉い所がある、何かと云ふと、一等船客は洋食ばかりだ、但し特に希望に依つては和食を喰べさす。そこで乘船最初の晝食の洋食が濟むや否や和食が喰べたいなアーと云ひ出した。こゝが偉い、何故かと云ふと大抵の人間はせめて洋食を三日程續けさまに喰べて見たいなアと云ふ。所が我々は一食にして早くも和食が欲

しいと云ひ出したことは、云はゞ平生洋食に飽き〳〵してゐると云ふことを裏書きしてゐる様なものだ。平生洋食を少つとも喰はないものに限つて、こんな船へ來ると、」洋食にシツカリ獅嚙み付いてゐる。我等ちつとも獅嚙付かない、何故ならば名士だから。

◎

測らずも舞踏の話が始まつた。僕は舞踏なら大に自信がある、と俄かに鼻を撫でた。すると針重君『君の様な西鄕隆盛みたいな身體をしてゐて、そんなしなやかな事が出來るかい、一體本當かい？』と訊く『本當か本當でないか證據を見せる。教へて欲しいと思ふ者は手を擧げツ』と云つた。すると選手一同ワア〳〵云つて手が擧げた。『よしツ』とトンと胸を叩いて見せて、只管夜の至るを待つた。晝でも僕は少つとも恥かしくなかつたんだけど、選手達は口を揃へて、『そりや教へる方は得意滿面かも知れぬけど、教へられる方は實にみじめな形をしなくちやならん、そんな所を外の船客に見

ちれるのは、まだお嫁さんを貰つて居らぬ我々の恥かしい所だから』と云ふので、さてこそ夜に延期したのだ。

夜になつた。海は月光で銀色に漂ふた。『みんな來い』と云つて、甲板へ連れ出し、試みに模範を示すからと、ワンステップと、フォクストロートの型をして見せる。『成程うま相だ』と針重君云ふ。相だが氣に入らんと云ふて大に不服を云ふたけど、『だつて未だ嘗て見たことが無いんだから』と云はれて、ウーンと己れは唸つて了つた。

偉大なる體軀の所有者針重君を第一番に引張り出さうとしたけど、大將すつかりベソ掻いて『こツ、こツ、これ許りは』と悲鳴を上げたのは流石に自己を知るの明があつた。若しあの二十何貫と云ふ身體で舞踏を覺えて、あの蠻力で振り廻したらそれこそ相手にされた淑女達は三日三晩骨の節々が痛み通すだらう。

選手達は一二三、一二三と己れの眞似をして見た。して見てから『成程斯うして經驗する所に依つて考ふるに他見男さんは確かに上手いに違ひない』と、漸つと僕の上

手であることに承認を與へてくれた。それ見ろ、敎へ込むのに骨の折れるつたらない。黒がねの樣な腕をヌツクと指し伸べ『此の手を何うすればいゝんですか』と訊くから『もつと柔かに、力を拔いて』と云ふても、『これ以上柔かになりません』と、始末に終へぬ。それを無理に身體を抱いて振り廻はして見せると、『相撲なら負けやせんぞ』と急に腕節を擦するんだもの、優美な舞踏を相撲と間違へるんだから、先生の己れの方がヒイ〳〵息を吹いて『も、も、も助けてくれ——』

フと誰れやらが、高師の太田君はピアノの名手だと云ひ出した。さア承知せぬ、ベトーベンの月光の曲を彈いて貰はうと談判した。イヤ迚ても彼麼難かしいものはと太田君急に尻込みするのを、『それぢや良い妻君が貰へないぞ』と欺し賺しゝて、一同で擔ぎ込む樣にして、圖書室までヨイショ〳〵と押し掛け、そこにあつたピアノ臺に無理に坐らせて、『さア名曲を君彈じ給はずや』と、一同神妙に眼を閉ぶつて見せたけど、もと〳〵太田君ホンの三時間ばかりピアノを人から敎はつた許りで、まだベトーベン

と云ふ名からして、はつきり知らぬと云ふ名手だから、尻込みして、天井を仰いでは塞ぎ込んで了ふ。これには折角眼を閉つて清聴しやうと構へた連中、俄かにカーツと瞑眼を開いて、『ピアノの名手と云ふものは天井ばかり仰いでゐるものか知ら』と皮肉つて、『僕の方がズツと上手いや』と我れも〳〵と乗り出して來て、ガチヤ〳〵鳴らす、『僕は桃から生れた桃太郎が得意だぞ』と云ふ前振れに、耳を濟ましてゐると、いつ迄至つても桃からと云はぬ、矢鱈にボン〳〵と許り鳴らしてゐる、『オイ何うしたんだい？』と聽くと『何うも此のピアノは怪しい』と云ふ。ピアノが怪しいんぢやない、腕前が怪しいんだ。

中には『君が代』を彈ける者がある。ウムこりや少々彈けるんだナと思ふてゐると『千代の千は何處を押せばいゝんだい？』と訊くんだから、ガツカリして了ふ。

それから一同は昂奮の投げ場に困つて、相手きらはず捉へて、舞踏だ、舞踏だと云ひながら、得體の解らぬものを、組みつ絆れつして踊り狂ふた。他の船客は實に面白

いと許り扉や窓から、叢りかゝつて覗いてゐた。

若い人々は流石に磊落、況んや學生で運動家ほど無邪氣なものはない。一同は夜の更くるまでキヤツ〳〵云つてゐると、

『他のお眠りになる客の邪魔になりますから』とボーイから注意されて、『ぢや寢てようかナ』と許り、自分の室へと一列に並んで一二、一二。

◎

翌朝、門司と下の關の中間へ船は碇泊した。五時間の碇泊だと云ふので、中には上陸する者も可成あつた。新たに乘込んで來た客もあつた。

豫め知らせて置いた未知の愛讀者が船へ訪ねて來ることになつてゐたので、己れは上陸しないで待つてゐた。

やがて一人の女中に大きな籠を持たせて、快活相な令嬢が遣つて來た。石炭の港門司で生れた故か色が黒かつたけど、愛嬌のいゝ娘であつた。

『東京のよりか屹度美味しいと思ひましたから』と、云つて令嬢は其の籠を女中から受取つて出した。聽けばお父さんお母アさんと協議して、何を上げたら良からうと、遂にバナヽに決定したんだと云ふ。濟みませんねえと挨拶しながら、横に坐つてゐた多くの選手連を振り返つて、

『諸君、喜べッ』と、眼より高く其の籠を振り翳して見せた。一同はパチ〳〵ッと拍手して、『色が黑いけど良いお嬢さんだ』『前途有望だ』『東京にもゐない美人だ』と滅茶苦茶に賞めたものだから、令嬢の君、すつかり嬉しさに羞かむで了ふ。

門司は見るからに眞黑であつた。あの灰色の煙り、船の雲集、見るからに喧騒、見るからに汚ない、下の闘の方は未だよかつた。それでも上がつて見たいと云ふ氣にはなれなかつた。

色んな物寶りが遺つて來た。本寶りも來た。あれこれ見てゐる裡に『他見男さんの本がある要りませんか』と、勸められたので、思はず頭を掻いて了つた。各選手は本

尊を前に置いて其の著書を讀むのが面白いからと、態と己れの本を買つて、聲高らかに戀愛の所を力を入れて讀んで『これは實驗談ですか』と、肉薄するんだから手痛い。若い者は名士に對する禮儀を知らんで不可ん。

◎

晉に名高き「玄海灘の荒波」は少つとも荒波で無かつた。モ少し荒れてくれなくちゃ玄海灘と云ふ名稱の光榮が薄らぐ樣で、「名稱」に對して氣の毒であつた。

『荒れたらいゝ』と私は云つた。すると、みなはヒドいことを云ふと云ふ顏をして私を見た。

『玄海灘の玄海灘たるを示して貰ひたい』と、大に肩をそびやかしたものだ。すると、『さう云ふ貴方が一番先きに船室の毛布の中へ駈け込む手合だらう』と、聽くものも默つてゐなかつた。然し遂に私は最後まで勇敢であつた。否多少の動搖中にも平然として圖書室で原稿を書いてゐた、自分ながら流石はと思ふ所がある。

玄海灘を過ぎると、今度は濃霧の心配があると云ふ、苦だしいのになると、一間先きが見えぬと云ふ、それが襲ふと、船は進路を過まつて了ふと云ふ、そんな話を事務長と針重君と二三の選手等としてゐる時に已れは云つた。

『一遍その濃霧に襲はれて見たいものですなアー。』

すると針重君が、

『オイ、オイ、今事務長が一生懸命に濃霧が來ないかと心配してゐるのに、君は』と、肩を叩いたので、成程と急に氣が附いて、

『只今の發言を謹んで取消します』と、頭を掻いた。大きな男が謹んだ所が殊勝だと感心されて大笑ひ。その内心希望してゐた濃霧が直ぐ遣つて來た。形あつて無いが如く、形なくしてあるが如く、やつて來る。白く包まれる。此の濃霧は二町先き程まで見えたから、うすい濃霧に違ひない。

暫らくの裡に直ぐ晴れた。今度は向ふに見える全羅南道にかゝつた。恰も雲の様に

ズーッと白く彩る、濃霧に襲はれるのは有難くないが、襲はれたのを見てゐると壯快だ、景勝が美化する。

島と云へば、この船に乘つて、いまだ眞に島が見えなくなつたと云ふ事がない。左になければ右にあつた、前になければ後にあつた、何んだか絶えず島をたよりにしてゐる様に思はれてならない、本當に何一つ見えぬ大海に放り出されたと云ふ氣分を一ッ經驗して見たいものだと思ふ。

◎

食堂で自分の前に吉田榮藏と云ふ人が坐つてゐた。商人と思はれぬ程痛快な愉快な人であつた。朝食の時、

『時に他見男さん、貴方に是非お眼にかゝりたいと云ふ婦人が二三人此の船にゐますがどうか會つて下さいませんか、實は私が宜しゆ御座いますと、トンと胸を叩いて引受けた手前があるんですから』と云ふ。飛んでもないことに胸を叩いて來たものだ。

『美人ですか。』
『女と云ふものは皆美人でないんですか』と、却つて逆襲すると云ふ始末。
『それぢや食事が濟んで廿分後にお目にかゝりませう。』
『何故廿分と限界を設けたんです？』
『初對面だから、顏を剃つてから逢ひたいと思ふ。』
『貴方は仲々愼重ですなア、美男子の稱號を續けて行くには並大抵ぢやありませんねえ』と、仲々口が惡い。
上甲板で三人に會つた。吉田君が紹介を濟ますや否や『もう我々みたいな野暮な顏が此の場所に御用がないでせう』と、早くも自己を知るの明があつて、一散に退却して了ふ。
卅歳ばかりの婦人の名は武内朝子さん、その次は廿のお孃さん、最後に卅二三の之れ又奥樣であつた。武内朝子さんは優れて美しかつた、その眼が實によかつた、實に

涼しい、ぱつちりしてゐた。私の見た初對面の印象は馬鹿によかつた。此の奥樣は十二歳位の自分のお孃さんを連れてゐたが、そのお孃さんは一寸顏を見せた限り見えなくなつて了つた。
みなは私の大の愛讀者だと云ふ、武内さんの姉さんは他見男さんの本と云へば氣狂ひの樣に嬉しがると云ふ、そんな事を訊かされて大に恐縮する。
武内夫人は大連大山通りの大商店の若奥樣だと云ふ。家は東京の大森にあり、別莊は小田原にあると云ふ。情けなや主人に昨年三月死に別れて、大商店を急に此のかよわい双肩に擔はされて了つたと仰しやる。
次の廿歳ばかりのお孃さんはお父さんが今から二年前に亡くなられたので、その墓參りに大連に行くんだとある。去年はお母アさん、今年は私の行く番ですと云ふ、お宅は何處ですかと訊くと、東京の澁谷だとある。それなら何うして遺骨を東京で埋めなかつたんでせう？　と訊くと、『自分が若し死んだら其の働いてゐた土地に埋めてく

れ』と云ふ父の遺言でしたからと云ふ、感心な凛々しい遺言だと思ふたら、父はクリスチヤンですと註釋を加へられた。

最後の夫人は國許の弟が亡くなつたのだ、それで歸國して來たんだと云ふ。

情けない、どれも之も亡くなりましたが附着いてゐる、良人がゐないで旅する女性の一人旅は考へて見れば、『亡くなりました』以外にないのかも知れぬ、皆さんお情けなう御座います。同情します、私し暗然たる氣がします。

話を始めてモノ、十分も經たぬ裡に突然武内夫人は急に妙な顏をしたかと思ふと、口を壓へる樣にして駈け出した。烈しい船酔ひを感じたらしい。それで急に一座は白けて了つた。

船酔ひと云へば庭球の猛者連中も先刻から少つとも顏を見せぬと思へば、みな寢込んでゐるらしい、今の若いものは弱いなア——。

明日は愈々大連へ着くと云ふので、最後の今晩ボーイ連の芝居があると云ふ、イヤ

芝居ぢやない活動があるんだと云ふ。どつちにしろ風變りだから贊成だ。

◎

船客に滿鐵理事の赤羽克巳さんが乘つて居られた。見るからに聰明な二人の令孃が一緒だつた。私が夜遲くまで原稿を書いてゐると、

『やア御勉强ですなアー』と、よく話込まれた。お孃さんの大きい方が淋し相だつたから拙著「大學出の兵隊さん」を進呈すると、大喜びで早速安樂椅子で頁を繰り始めて、幾度か『面白いわ、面白いわ。』

小さいお孃さんはそれは可愛い笑窪の持主であつた。その見上ぐる眸は怜悧に輝いてゐた。人一倍子供好きな己れは此の孃ちやんが何んとも云へぬ可愛いかつた。聽けば双葉の尋常科だと云ふ。各船客からは此の孃ちやん一番大モテであつた。

英文學者で名高い頭本元貞さんも一緒だつた、默々として滅多に口をきかぬお爺さんであつた、時々外人を捉へてはお得意の辯を振ふてゐた。頭本さんとは知らぬ針重

君、

『あの爺さん、英語が上手いぜ』と、云ふから、己れは其の名を云つて聽かすと、『それなら上手い筈だ。』と、頭を掻いた。

◎

船客の多くは甲板の安樂椅子に寢そべつてゐた。さにあらざるものは大抵各人の船室でゴロ〳〵してゐた。そうして一日は知らず〳〵に過された。

昨日だつたか、船醫に紹介しませうと山根君が己れを引張つて行つた。その時己れに何か揮毫をと云はれた、けど己れは乙女の樣に急に羞かむで見せた。己れ見たいな衣は肝に至るが鹿爪めらしく揮毫でもあるまいと思ふたからだ。玆等になると、自己を識るの明があるから感心だ。未だ若い癖に他見男書でもあるまい。

◎

事務長の話に依ると、一度び身投げしたものは殆んど助からぬと云ふ。それは船の

先端から投げた者は、いつしか船側に寄せ付けられ、同時にプロペラーに卷き込まれて、その儘見えなくなつて了ふと云ふ。よしんば又卷き込まれなくても、素破身投げだ、そら救助と、俄かに停船するには早くて五分間かゝる、その五分間のうちに、船は七八町離れて了ふ。それを捜索してゐる裡に何時しか姿が見えなくなつて了ふ相である。畫の身投げなら時には助かるかも知れぬけど、身投げする方でも考へてゐるから、云はゞ救はれたく無いから、殆んど大抵は夜になつて身投げすると云ふ。夜の身投げで未だ嘗て助かつた例がない、第一捜索の方向が皆目わからぬと云ふ。それでも一應は船の義務として盡すけど、先づ駄目ですなアとあつた。

『貴方は今までの裡に身投げを見た經歴がありますか』と、訊くと、

『一度あります、それは情死でした。夜の十一時過ぎフと此の窓から餘り月が綺麗なので、ヒョッと何氣なく顔を出して見た所、若い美しい男女がピッタリ寄り添ひながらヒソ〳〵話合つてるぢやありませんか。あさう〳〵其時男は煙草を吸ふてゐました。

煙草を吸ふ位な餘裕があるんだから、よもや情死するものとは思はれず、却つて或る種の情緒でも味はふのだらうと、好奇心に捉はれて見てゐると、その裡男は服んでゐた煙草をパツと海へ投げ捨てたかと思ふや否や、殆んど呀ツとも云はさぬ電光石火の早さで、二人とも颯と身を躍らせて飛び込んで了ひました。あれなどは始めから死ぬ氣で無かつたかも知れぬけど、餘りの美しさに云はゞ「月光の誘惑」にツイ其の氣になつたんですなア。エ、無論二人とも助かりませんでした。』

それを聽いた時私は死ぬまで、ゆたかに煙草を燻らしてゐた男の度胸が惜しくてならなかつた。

——(をはり)——

一不許複製一

昭和十四年一月卅一日印刷
昭和十四年二月五日發行

〔支那街の一夜・ハルビン夜話〕
定價壹圓五拾錢

著者　奥野他見男

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一ノ三〇　大谷德之助

印刷所　東京市神田區神保町一ノ三〇　大洋社印刷部

發行所　東京市神田區神保町一ノ三〇　大洋社出版部
振替東京五九〇二番

★本社發行圖書の目錄ハガキでお申込次第無代進呈！

製本・大洋社製本部

大洋社版・最新刊名著

窪田空穗著	歌舞伎と歌話	短歌隨見	新四六函入上製 定價壹圓八拾錢
澁川玄耳著		支那獵奇秘話	新四六函入上製 定價參圓
澁川玄耳著		支那哀怨秘史	新四六函入上製 定價參圓
小林鶯里著	英傑	豐臣秀吉	新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢
小林鶯里著	名將	眞田幸村	新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢
小林鶯里著	志士	高山彦九郎	新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢
大隈博誠著	必ず立身出世する	名前の附け方手引	四六版函入上製 定價壹圓五拾錢
松尾五郎著	必らず儲かる	株式相場の實戰術	四六版函入上製 定價壹圓五拾錢
前田默鳳編著		眞行草字鑑	菊半截函入特製 定價貳圓
庄野信治著	戰時下の	式辭挨拶手紙教本	菊版上製 定價壹圓五拾錢

大洋社版・絶讃修養名著

生島隆一著	感激美談	人になるまで	新四六判函入上製 定價貳圓
生島隆一著		青年よ希望をもて	新四六判函入上製 定價貳圓
生島隆一著	感激美談	正しき人の道	新四六判函入上製 定價貳圓
生島隆一著		青年立志の礎	新四六判函入上製 定價貳圓
淺野彌太郎著		新しき青年の書	新四六判函入上製 定價貳圓
淺野彌太郎著		希望に輝く道へ	新四六判函入上製 定價貳圓
淺野彌太郎著		趣味の哲學	新四六判函入上製 定價貳圓
青年修養會編	近代日本	偉人の青年時代	新四六判函入上製 定價貳圓
日本修養聯盟編		現代青年讀本	四六版函入上製 定價壹圓五拾錢
道重信敎著		人生を歩み行く道	新四六判函入上製 定價貳圓

大洋社版・名著

倉田白峯著	全國神社物語	新四六函入上製	定價貳圓五拾錢
畔上博著	もの知り百科辭典	四六版函入上製	定價貳圓四拾錢
梶天眞著	心靈現象と死後の生活	四六版函入特製	定價壹圓七拾錢
梶天眞編	研究資料 變態心理の解剖	四六版函入特製	定價貳圓
人相研究會 眞理處世要訣	人相の神秘	三六版特製	定價壹圓貳拾錢
骨相研究會 眞理處世要訣	骨相の神秘	三六版特製	定價壹圓貳拾錢
岡本榮龍著	九星と運命の神秘	三六版特製	定價壹圓貳拾錢
高島易研究會 易斷人事及び相場鑑定	易の神秘	四六版函入特製	定價壹圓五拾錢
福本福三著	生絲と人絹の基礎知識	新四六上製	定價壹圓五拾錢
濱野恭平著	綿絲と綿布の基礎知識	新四六上製	定價壹圓五拾錢

大洋社版・絶讃療病書

長濱繁 石崎仲三良著	男女性典	新四六判函入上製	定價貳圓
堀越龜藏 市石圭佑著	すゑ方圖解 お灸の新療法	新四六判函入上製	定價壹圓五拾錢
藤野懿治著	臨床 皇漢藥醫方詳解	菊版函入上製	定價貳圓
萩原良一郎著	家庭療病寶典	新四六判函入上製	定價貳圓
醫學博士 堀內信著	胃腸療病全書	新四六判函入美本	定價壹圓八拾錢
醫學博士 藤井靜雄著	血壓療病全書	新四六判函入美本	定價壹圓八拾錢
醫學博士 高田重正著	結核療病全書	新四六判函入美本	定價壹圓八拾錢
醫學博士 朝岡稻太郎著	神經衰弱根治療法全書	新四六判函入美本	定價貳圓四拾錢
醫學博士 增井龍惠著	蓄膿症根本治療法全書	新四六判函入美本	定價壹圓八拾錢
佐藤進一著	神仙 不老强精秘術	四六版函入上製	定價壹圓五拾錢

大洋社版・絶讃文學書

宮島新三郎著	訂改 明治文學十二講	新四六全三三二頁 定價貳圓
宮島新三郎著	訂改 大正文學十四講	新四六全五二一頁 定價貳圓
宮島新三郎著	訂改 短篇小說新研究	新四六全二五七頁 定價壹圓貳拾錢
黑澤隆信著	芭蕉の歩んだ道	新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢
黑澤隆信著	一茶俳句研究	新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢
高濟虛子著	俳句入門	新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢
內藤鳴雪著	俳句の作り方味ひ方	新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢
正風俳句研究會編	昭和新選 俳句大全	四六版函入上製 定價壹圓五拾錢
松村英一著	現代短歌辭典	新四六判函入美本 定價壹圓七拾錢
笛木謙治著	新譯古事記	菊金字函入特製 定價貳圓

388
321

終

大洋社版